

中津川宿～大井宿 10.4km を歩く

7月1日いつもの4人で中山道は恵那路を歩きに出かけました。お天気や日程の都合でなかなか計画できずにいましたが、4月に歩いて以来です。これからは夏の暑さのため歩くのは避けたいもの、そのため、曇り模様の続く日に、夏前の最後のチャンスを狙い出かけました。

朝の中央線は10両編成

街道ウォーキングで初めて中央線を利用する、東浦駅 7:19 の区間快速はかなりの混雑、さらに金山駅での乗り換えは大混雑。自由に歩くことはできず人の後ろについてのろのろ歩き。毎日毎日こんな通勤をしているみなさんは大変なことだ。満員電車の通勤経験のない私には耐えがたいこと、働くと言うことはほんとに大変。

中津川行きの快速に乗りかえるため待っていると、高蔵寺行きの普通列車が満員のお客さんを乗せて発車して行った。次には特急しなのがかなりのスピードで走りぬけて行った。特急が金山に停車しないとすることは、市内の停車駅は名古屋と千種の二か所ということかな。その次に来た快速中津川行きもかなりの混雑だったが、最初の停車駅鶴舞で4人そろってボックス席に座ることができた。そして、いつものようにおしゃべりが始まった。



中津川駅前



菊牛蒡の垂れ幕があるお店

われわれが時々利用する東海道線は、愛知県・岐阜県の主要都市を結んでいて、通勤時の快速は8両編成で運転されているのに、こちらは普通・快速ともに10両編成で運転されている。それだけ利用者が多いということで、中央線という山間部を走る鉄道と言う思いがあり、意外な感じがする。確かに名古屋のベッドタウンとして大いに発展しているし、企業の進出も多いのだろう。それに、東海道線はロマンスシートタイプなのに、中央線はロングシートが多いのも特徴だろう。

多治見を過ぎると各駅に停車し、ここまでは1時間に6本運転されている列車も武豊線並に2本となる。つまり、名古屋のベッドタウンは多治見までということになる。進むにつれて辺りは緑に包まれた山間であり、のどかな風景はなぜか心安らぐ思いがする。

「モリアザミ」の根を漬け込む菊牛蒡

9:21 中津川駅に到着、駅を9:30にスタートして駅前の大通りを歩く。すぐに和風のりっぱな家が現れる、日本盛りの看板と菊牛蒡漬の大きな垂れ幕が目を引き。菊牛蒡とは菊いものことかな、と友が言う、はて何かな!! この時は分からず帰ってから調べてみると、恵那地方の特産で、「モリアザミ」という植物の根で、その昔は滋養強壯の薬として使われた。切り口が菊の模様に見えることから菊牛蒡と呼ばれるようになったと言う。恵那山に初雪が降る11月初旬から漬け込みが始まり、今も市内では二つの商店が味を競っていると言う。

そして、赤い煉瓦の敷き詰められた広い歩道には大きな植木鉢がおかれ、これも大きなギボウシが緑の葉っぱを広げており、なんとなく涼やかな気持ちになる。二つ目の大きな交差点「新町」を右折すると、その通りが中山道で2軒目に落ち着いた和風の建物がある。「栗きんとん」で有名な「すや」で、この「すや」は昔「酢」を作っていたことから屋号を「すや」にしたという。

中津川の名士「間家の蔵」は赤穂浪士とつながる

「すや」に続き向かいには「銃砲火薬」の看板も見える、山の深いこの辺りでは猟師さんも多く、獣を打つ鉄砲などを扱う店があるのだろう。その先には「桂小五郎の隠れ家跡」という看板までもあった。そんな通りは道幅が狭く、両側に街路樹が植えられ道路は黄色の小さな石がたくさんちりばめられており、とてもおちついた雰囲気がある。

すると「間家大正の蔵」という煉瓦造りのりっぱな門柱があり、開館中・無料とある。

ならば立ち寄り見学することに。この間家というのは、江戸時代初めころに中津川村に移り住み、東濃随一の豪商と言われるようになりました。間家は中津川宿の年寄役を勤めるなど、宿の経済・文化に大きな役割を果たしています。経済面から見ると、白木や白木製品、塩等の販売で莫大な利益を上げたといわれています。明治以後には銀行経営に乗り出すなど中津川の経済界を常にリードしていました。



券囲気のある中山道



間家の蔵

この蔵は大正6年に建てられた鉄筋コンクリート構造3階建ての倉庫で、敷地は現在の中津川郵便局を中心として3,000㎡ありました。八つの土蔵や倉庫と、四つの作業所、茶室などがありました。後に市へ寄付され今は市の有形文化財に指定されています。2階まで上がって見て廻りましたが、中は木造で帳簿などの展示もありました。私の記憶に残ったのは間家の家系図です、そこにあったのは赤穂浪士四十七士の内の三人が、この間家の人で間喜兵衛、間十次郎、間新六の三人だったのです。

うだつの上がる風格ある家が並ぶ

蔵をあとにして直に橋を渡ると脇本陣跡の碑がある、その先の大きな交差点を渡ると角にとっても大きなうだつのあがる家が見えた。これは何か特別な家だと思い前まで行くと、中津川宿本陣の説明板があつた。そこには建物の間取りなどの説明はあるが、だれが本陣を務めたのか書かれていなかった。その隣の建物が歴史資料館でその前に歴史の道・中山道の説明板があり、向かいには本陣跡の碑が立っていた。そこには中津川宿は江戸から四十五番目の宿場で、寛政年間(1789~1800)には家が175軒、人口1,230人となり、中山道の中でも大きな宿場であつた。ここに本陣と脇本陣が向かい合い、道の

中心には用水が流れていたと記されている。帰ってから調べてみると、本陣は「市岡家」が務め、脇本陣は「肥田家」が務めた。

その隣にもうだつの上がる大きな家が並び、玄関らしき所には高さ 2.5m ほどの石柱が 2 本立っている。中津川村庄屋居宅の説明板があり、江戸時代は庄屋の肥田家(脇本陣を務めた)が所有し、島崎藤村の夜明け前に小野三郎兵衛として登場している。江戸後期には旅籠を経営し、明治 26 年には恵那山に登ったウエストーンが宿泊したという。明治 30 年代になると曾我家が譲り受けて、中津川で最初に開業した医院となった。今は市の有形文化財に指定されている……と説明されている。



中津川で最初に開業した医院



はざま酒造

庄屋居宅から 3 分も行くと枳形で、左に曲がると「すや」とともに栗きんとんで有名な「川上屋」がある。古い家並が続き、屋根には右から「栗菓子」と書かれた大きな看板が乗っている。隣の建物は漆喰仕上げになっているものの、1 階は車庫で軽トラックが鎮座していた。商売をしていると車庫に困ることがよく分かる。そこから 2 分も行くと枳形は右に曲がり、その角にもうだつが上がり酒樽が並ぶ建物がある。お酒の「恵那山」をつくる「はざま酒造」があり、白い漆喰仕上げとうだつが日本建築の風格を漂わせている。その隣には白い漆喰の蔵があり、なぜか赤いポストが立っている。さらにその隣には同じように趣のある建物「矢野書店」が並ぶ。すばらしい景観だ!! この景観が中津川宿の財産だと思った。

双頭一身道祖神と呼び名が二通りの一里塚

古い家並を抜けると、その先の中山道の道筋は現在ではほとんど姿をとどめていない

という説明板があった。そこから10分も行き津島神社参道分岐を左に曲がると、馬頭観音など四つの石碑がある。さらに5分程行くと駒場の高札場跡の碑があり、3枚の高札が掛けられていた。その先でつづら折りの坂「こでの木坂」にぶつかり、歩行者は階段を登って行く。登りきるとたくさんの石碑があって、その中に双頭一身道祖神があります。中山道から分かれる苗木道の分岐点に置かれており、「こでの木坂」の道しるべになっていたと言います。文化13年(1816)の建立で、男女別々の頭部を持ち、肩から足元にかけて一体になっている珍しいもの。確かにこうした道祖神は初めて見た。

道祖神から目と鼻の先に上宿一里塚跡があります、こじんまりとした塚の中心には榎と思われる木が1本植えられて、緑が茂る美しい形です。南側の塚は消滅し昭和9年に北側だけ復元したと言う。でもこの一里塚、説明板と石碑に書かれた一里塚の名前が違っているのだ。おそらく石碑を建てた時と、説明板を作った時の地名が変わっていたのだろうが、ちょっと気になる。一里塚としては同じ名前をつかって表示するほうが良いと思った。



双頭一身道祖心



上宿一里塚跡

ランチはコンビニ弁当

一里塚を過ぎると街道に沿って水路が流れ、田んぼの稲は少し成長して緑の色が濃くなっている。集落の間を抜けて行くと道は上り坂となり、畑にたくさんのソーラパネルが設置されていた。坂を上りきると街道は国道19号と一緒に、中央高速道路のランプウェイにぶつかる。その手前にコンビニがあることは調べておいたが、間違いなくコンビニがあったので立ち寄ると、隣に小石塚立て場跡の碑が立っていた。ここを逃すと恵那市内か駅まで行かないと、食事処はない模様なので弁当を購入した。

コンビニを出ると中山道は一度途切れて、階段を降りて国道の右側へ回り込み、国道に並行する中央本線に沿って進む。弁当を買ったので早く食べたいと、場所を探しながら歩く。線路沿いの道は車は通らず、田んぼの緑がとても美しい場所だったので、道端に腰をおろしてランチタイムにした。すると、これまで曇り空で暑くもなく絶好のウォーキング日和だったのに、おてんとうさまが顔をだすし、時々車も走ってきた。そのため、食べ終わるとすぐ歩き始めた。すると、適当な木陰がありベンチになりそうな場所がそこそこにあるではないか。こんなことならもう少し先まで歩けばよかった、でも先のことは分からないのが世の常であり、これもいたしかたない。

珍しい六地藏と珍しい花「スモークツリー」

少し歩くと六地藏がある、ここの六地藏は地藏さんが六体あるのではなく、六面に地藏が六体刻まれた石灯籠の形をしている。これによく似たものは大浜の街で見たことがある。説明板には六地藏石幢とあり、始めはお寺の入口にあったものが街道に移されて旅人が道中の安全を祈り、心の安らぎを得て行くものでもあったといえます。地藏菩薩は釈迦が入仏後、無仏の間この世に現れて、衆生を救済する菩薩と信じられていました。六地藏としての信仰は平安末期にはじまり、石幢は六地藏信仰と結びつき室町末期から普及していますが、この地方では数少ない一つという。

珍しい六地藏を過ぎると、今度は珍しい花?が見つかった。背丈は2.5mほどもあり先端や所々に丸いふわふわの物がたくさんついている。これまで見たことはなく初めて見る、こんな時には友の細君の出番。何かを訪ねると、「スモークツリー」とのこと。言われてみれば、何かふわふわしているのは煙みたいでもある。その周りには白いアジサイがきれいに咲いていた。このスモークツリーを帰ってから調べてみると、ウルシ科の落葉低木で3mから5mになる。中国南部、ヒマラヤから南ヨーロッパに分布するとあった。そこから少しの所に「式内坂本神社八幡宮」の石柱があるが、神社はかなり奥にあるようなので寄らずに進む。次に千旦林村の高札場跡の碑が立っている、その少し先で街道は新道から分岐して左へ折れて行く。少し先で道は右へカーブするが、そこに、幅の広い?大きな家があった。この造りだと家の中央部はとても暗いのではと気になった。

そのあたりは田んぼの緑が鮮やかで美しい景色が広がり、のどかな田舎の風景だ。そして、立派な蔵のある家がそこそこに見られる。田舎は緑だけでなく、財もたくさんあるのだろう。



六地藏



スモークツリー

茄子川村の「白木改番所」と小休所「篠原家」

そこから5分程行くと中平神明神社の説明板がある、神社は見えず街道より奥まった所にある。さらに5分も行くと「将監塚」の説明板がある、どれがそうなのか探してもそれらしい物はなくて分からなかった。あきらめているとおじさんが通りかかったので聞くと、草の中にある灯籠みたいな石碑だという。岡田将監のことで、彼は慶長6年(1601)5.000石を与えられて、二代目美濃代官になった人。当時大井村には名古屋城築城の際の「材木番所」があり、木曽材持ち出し奉行として駐在したらしい。

将監塚から5分行くと一里塚の説明板があるが、塚がどこかで見回すと説明板で見えなかったが、その背後に石碑が立っていた。「三ツ家の一里塚跡」の白い碑が周りの緑の中に浮き上がっていた。その先に割と大きな道路が交わる交差点があり、そこには地下道が設置されていた。山の中の交差点なのになぜ地下道がと思ったが、子供たちの通学路になっているらしい。

坂本立て場跡を過ぎて川を渡ると、茄子川村の高札場跡の碑を見てその先田んぼのあぜ道に「尾州白木改番所跡」の碑と説明板がある。尾張藩の直轄地であった木曽山から伐採した材木の輸送は、重量のある丸太材は木曽川を利用して流送し、軽量の白木類は牛や馬で輸送しました。木曽川筋には各所に「川番所」が、中山道には「白木改番所」が設けられ、抜け荷の監視と量目の検査など厳しい取り締まりが行われていました。これらの施設は明治4年まで続き、廃藩置県の措置により廃止されました。

尾州白木改番所跡から30分歩くと大きな家が現れる、主屋の隣に門が併設されていてその前には「明治天皇茄子川御小休所」の石碑が立っている。この家は篠原家で、加賀前田家の重臣篠原一孝の子、弥右衛門が当地に移り住んだことに由来するという。篠原

家は中山道通行時の休泊施設として、本陣や脇本陣と同様な役割を担い、さまざまな文人墨客の足跡も残されている。和宮、明治天皇が休憩した部屋、表門などが当時のまま保存されている。ここから大井宿までは一里(4km)、中津川宿まで一里二十三町(6.4km)の距離があり、両宿間二里半六町(10.4km)と長丁場のため、ここに茄子川小休所が置かれた。家の西側には中山道から遠州秋葉道への分岐を示す大灯籠が置かれ、大名、姫宮通行などの休憩所の役割を果たした。



「尾州白木改番所跡」の碑



「明治天皇茄子川御小休所」の石碑が立つ篠原家

「社宮司」のいわれ

篠原家を出て15分も行くと「恵那市」の看板が現れ、街道脇の田んぼの畦に大きな石が置かれて「中山道 是より大井宿」と刻まれている。この時、時間は午後1時30分。すでに4時間が経過している、あと1時間程で歩くことができるかな.....。

石碑のすぐ先の道沿いに一つ馬頭観音があった、そこから5分も行くと今度は田んぼの畦に「社宮司」の説明板が立っていた。10m程離れたところに大きな檜が一本そびえており、その根元に二つの石祠が見える。説明では一つは氏神で一つが社宮司とある。地元東浦では森岡と緒川にあるが、社宮司は中部から関東に多く知られており、信州の諏訪が根元で土地の神の信仰であり、木の神とされています。しかし、恵那市内の社宮司については、近世初めの土地調査に使用した尺杖や水縄を土地の神に謝し納めたところと伝えられていると言う。中山道沿いの社宮司は、中山道分間延絵図によれば馬籠宿から大湫宿の間に二か所のみとある。ここ岡瀬澤の田んぼの多くは江戸時代初期に開かれました。そのため検地に関係があると考えられています、と記されていました。なるほ

どひとつ勉強になった、では東浦の社宮司はどんなものだったのだろう？



岡瀬澤の「社宮司」(木の根元にある石祠)



甚平坂の休憩所

すばらしい展望の甚平坂

社宮司から少し行くと上り坂になる、ここは甚平坂と呼ばれているが、明治天皇が巡行の際坂がきついので頂上を削って馬車が登れるようにしたと言う。10分程行くと「甚平坂関戸一里塚 約100m」の案内があった、でも一里塚の跡は分からなかった。頂上少し手前の視界の開けたところに展望休憩所があり、トイレも整備されていた。そして、観光案内板の工事も行われていた。ここで少し休憩、今歩いてきた集落が足元にあつて、遠くに御岳山、恵那山が展望できるすばらしいロケーションが広がっている。

甚平坂の休憩所を後にすると下り坂になると思ったが、案に相違してさほど下ってはいなかった。すぐに恵那市立大井第二小学校がある、そしてそのすぐ先に見つからなかった関戸一里塚が現れた。そこには江戸日本橋より八十七里と刻まれている。案内板にあった約100mとはどんな測り方をしたのかと思わざるを得ない。ここまでまだ記念になる撮影をしていないのに気が付き、ツーショットで一枚パチリ。これで大井宿を歩いたことが証明できる。

柵形の角は本陣だった

一里塚跡から10分程行くと菅原神社があり、その前に大井宿まで300mの看板と、宿場内の説明図があった。この場所は大井宿が一望できる高さであり、階段を降りると坂の途中に「上宿石仏群」がある。昔は村の境に地藏菩薩や神様をまつり、病魔が村へ入

らないように願うことが多かった。大井宿の人たちも宿場外れのこの場所に数多くの石仏を立て、悪病や悪人の侵入を防ぎ宿場内の無事息災を祈ったのである。十数個の石仏の中で一番左には、紀州日高で宝暦8年(1758)に生まれ、文化・文政のころこの地方に来て念仏教化を行い、多くの信者を得た高僧徳本上人の碑がある。

その少し先に小さな水路ではあるが水がとうとうと流れる用水があった、「山本用水」という説明板が立っていた。これは田畑の灌漑用に山本(阿木川ダム下)から安永元年に引いてきたもので、5.400mほどの長さという。その先で明智鉄道のガードをくぐると大井宿だ、宿の成立は古く、文禄年間(1592)には旅籠も置かれ、伝馬も置かれていた。名古屋・伊勢に通じる下街道の分岐点もあり中山道の旅人だけでなく、伊勢参りや善光寺参りの参拝客や、商売を訪れる尾張商人や尾張に向かう木曾荷などで、美濃16宿中随一の繁栄を誇っていた。本陣1、脇本陣1、旅籠41軒、人口は466人(1843)だった。



大井宿高札場跡



大井宿本陣前

宿の入口は五妙坂で玉石を積んだ石垣が続く斜面に大井宿高札場がある。8枚の高札がかかげられており、それらの解説版もあった。その下には本陣まで150mの案内もある。その先は柵形になっており左へ曲がる、1分も歩くと次の柵形で右に曲がるが、その角に本陣はあった。そんなに大きくはない門と、一部漆喰を使った塀が保存され本陣の石碑が立っていた。それにしても柵形の角に本陣があったのはこれまでなく、立地条件はとても珍しい。昭和22年に火災で主屋は焼失してしまうが、幸いにも表門周辺は焼け残り、安土桃山様式を伝える門は今にその姿を見ることができる。

柵形に囲まれた歴史地区は昔の大井が感じられる

本陣跡の枳形を右折すると整然とした街並みが続き、格子戸を構えた旅籠屋風の家や、ムシコ窓の家々は昔の姿を残しています。最初の家が庄屋古山家で、屋号は「菱屋」といい酒造りをしていた。享保年間～幕末まで 150 年間大井村の庄屋を務め、名字帯刀を許された旧家である。現在は資料館になっているが、予想通り月曜日はお休みだった。

その隣に問屋場跡の宿役人の家であった「林家」がでんと構えている、問屋場は人や荷物の継立事務を行うところで、宿役人(問屋・年寄り)や下役人(人足指・馬指・書役など)が勤務していた。宿役人は幕府の命により、毎日人足 50 人と馬 50 頭を使い、隣の中津川宿と大湫宿へ主として公用の荷客を輸送したという。このように宿役人は宿場の最も重要な役人で、宿内の有力者が務めた。



宿役人の家「林家」



明治天皇が宿泊した部屋

その隣も同じような立派な家があり、「明治天皇行在所」の石柱が2本も立っている。明治13年6月明治天皇が行幸の際、ここ伊藤家で宿泊されたと言う。あちこちに天皇が利用された家はこうした石碑があり、なるほどと通り過ぎようとする、「どうぞ中へ入って見学してください」と声がかかった。それならと案内してもらうことにして中へ入ると、ボランティアの拠点になっているようで数人の方がいた。はじめに天皇が宿泊した部屋を案内してくれたが、その説明によると、天皇が来ることが分かったのは3か月前だったという。しかし、そのとき本陣・脇本陣と言われた家はすでに役人が使用しており使えなかった。そのため、伊藤家では天皇が宿泊できるように増築したという。その増築した部屋は一段高くなった上段の間だが、3部屋ありお付きの方等の使う部屋も併せて上段になっていたのが不思議だった。その中で天皇が使われた部屋の欄間は、一枚板から五輪の輪のように輪をくりぬいて造られており珍しい物と言う。さらに、離れにお風呂、トイレなども新設された。お風呂は水を入れて沸かすのではなく、お湯を

入れて使用するものだった。これでは適温にするのに係りの人は大変だろうにと思った。そして、トイレは使用しなかったとか。などなどいろいろなお話を聞くことができた。そして、ここ伊藤家の隆盛を物語る「四連蔵」も案内してくれたが、痛みがひどくなり何とかしたいが、今のままではこの建物を活用することができないと嘆かれていた。確かに、歴史遺産だからなんとかしようと言っても、それだけで何とかなるものではないのが現実。いただいたパンフレットによると、昭和8年に当時の文部省により「明治天皇聖蹟」として史跡に指定された、この時石柱の1本が立てられたのだろう。今日では資料館・ギャラリーとして公開されている。



保存に悩む「四連蔵」



大井橋の風景

このあと四つの柵形を通り、大井橋を渡って恵那駅に 15:00 到着した。